熱帯の旅人

坂井瑞穂

リシルギ族の最後の村を抜け小川に架かる木橋を渡ると、砂塵道は更に向こうの深い草叢を縫って蛇行して見えた。辺りは検問所はおろか人ひとりの姿なく、国境を示す目印は何も見当らない。只、薄ぼんやりと日は高みを増していた。

三月十五日早朝、京都府工大生鈴木康敏は旧インドシナ連邦構成国のひとつククルンを目指していた。首府ククルン＝ンプへは残り四十粁余りを歩かなくてはならない。前日午後、辺境バスに乗りこみ、プルメリヤの花香るビエンチャンを発った。そして終着地同じ旧インドシナ連邦のリシルギには深夜二時過ぎに到着した。屋根のない発着所では集札係が乗替案内を行っていて、ククルンへは一切の交通手段がないこと、そして観光査証（ビザ）は直接公爵邸へ行けば簡単に貰えることを丁寧なマレー語で教えてくれた。小公国ククルンでは旧王家の親族が市内に旅籠や木賃宿をもっているから寝起きに困ることもないだろうとも付け加えた。

このバスは途中小公国を三つ通過する。リシルギの入国審査があったのは到着の約一時間前、眠気のうちに差し出した旅券には、このとき同時に出国印が押されていたのだ。クアラ＝ルンプルで三日かけて取得した通過査証も用済みとなり、あとは只管歩くしかない。行先は暗闇の向こうの小公国だ。足どりは重く、耳鳴りを繰返していた。

康敏は土手の萱草に腰を下ろし、持っていた粟餅を食（は）んでいた。この季節、連日のように午後になると降りだす豪雨に遭わないためには、残り十七、八粁を四時間程で歩けばよいところに来ていた。何もない草地の遥か向こう北東の方角には瀾滄地方の高山が鮮明な稜線をみせている。夜行疲れも残る程感じなく、乾いた北風が心地よい。

そのとき、周囲の静寂を破る鈍いエンジン音が草の繁みから途絶えがちに響いてきた。彼は餅を片手にそちらの方向へと進んでゆくと、一人の若い男が故障した単車を前に、修理できずに困り果てている姿があった。

その男の手作業を見て、康敏には何をしているかがすぐ判った。磨耗したプラグの先端を交換すればエンジンはうまく発動するだろう。しかし男は焦燥しきった様相

でいる。仕方ない、ここは修理屋どころか人家の一軒もない大草原なのだ。

〝動かないんだよ。僕には繕せない。〟

彼の訛りの少ないマレー語が康敏に行動を促した。連邦内唯一のキリスト教国ククルンでマレー語が通じるか疑問だったのだが、

〝繕せるよ。僕にかして。〟

彼が同じ年格好だったことも康敏を安心させた。近くの雑木林から堅草と檳郷の樹液を採取してくると、その男は終始不思議な面もちで見ていた。

単車は無事エンジンがかかった。

〝君は素晴しい。〟

工具も部品もないままに修理を終えてしまった康敏の手業に彼は感激していた。

〝有難う。君は日本人か、市街へ行くのか、この車で一緒に行こう。名まえを教えてくれないか。僕はヨシプだ。〟

〝僕は鈴木だ。〟

ヨシプは車体のSUZUKIの文字に見入っていたが、康敏のこの処置だけでは二人乗は無理と判断し見送ることにした。自分は歩いてゆけるから大丈夫だと。

〝又会おう。〟

そう言うとヨシプは威勢よく単車を走らせ去っていった。

午後一時過ぎ、街に着くには着いた。しかし農家が数多く散在しているだけで、市の中心がどこなのか判然としない。強烈な日差しは隠れる様子もなく、はやく目的地に達してしまいたい気持ちになってきた。やがて立派な造りの家屋が目立つようになると、同時に雑貨商など店舗の看板が目に入ってくる。建物は丸太の骨組に竹材の壁、椰子葉の屋根の風通しのよい造りで時折中での生活が垣間見えたりもする。長旅の疲れが癒えるのもそんなときだ。

康敏は一軒の茶房を見つけた。店を囲んで見事な風鈴仏桑花の生垣に飾られ、中からは大勢の話し声が聴こえてくる。着いたばかりの町では何でも人に尋ねてみるに限る。彼がまずすべきことは宿地を確保し、公爵邸に行き観光査証をとり外人登録を済ませること、そして通貨の両替もせねばなるまいがこの町に金融機関などあるのかという気持ちになってくる。

文明化に遅れたクワルンはその特殊な歴史的背景から、いまをもって観光客の訪れもなく、マーキュリー&ビーナス社のガイドブックにすら詳しい案内がないという状態なのだ。マレーシア、タイ、カンボジア、ラオスの各国では、旧インドシナ連邦の全範囲で現在も自国通貨が使えると言っている。現在、彼の持参金は日本円、米ド

ル、マレーシアリンギで、小銭以外靴下に縫い合わせていた。

店内の賑やかな声は卓上のサッカーゲームに興じる男たちの歓声で、時として壁の羽目板にまで玉をとばす連中を見ていると他の客は迷惑しないのかと思う。内装はマホガニイのアンティク調で竹楼（バンブーハウス）の外観とは対称的な欧州の雰囲気がある。ただ無造作に通路を遮るジュークボックスが目障りだ。あれも使われてないに違いない。

彼は今たしかに東アジアの辺境に来ている。ここから帰国するにも面倒な通貨査証を再取得して同じ道を戻りタイまで下るか、相変わらず中国が領有権を主張しつづけている瀾滄州を経て雲南省の大理へ行くか、道はこの二つである。何が彼をこの地に惹きつけたのか、最初はレディメイドの航空券の順路に従ってタヒチからバリ、マレーシア、タイ、カンボジアと旅し、それを使いきるとあとは気の向く儘にやってきてしまったのだ。

〃卒業旅行ですか。〃

居合わせたツアー参加者にはきまって同じ質問を受けた。

〃そうなるかもしれません。〃

康敏は常にこう答えたが、実は彼は大学では机上の苦悩に沈む日々を送っていて、次第に教科内容に興味を失いつつあった。所詮先端技術など関心はもてないが、さりとて中途退学する勇気もない。幼少時からメカいじりは好きだったから自動車整備工かピアノ調律師といった技術職として将来を埋めよう、そう思うことで何とか心の退廃を免れていた。

〃何を飲む（カムミニム）んだい。〃

座ったまま溜息をついていた康敏に給仕がきいた。彼の反応が遅いと、カウンターに山積みされた見馴れぬ果実のなかから大小二つをとり、ミキサーにかけられると飲んでみろとそれが出された。見廻すと客たちは、好みのフルーツを自分でとってジュースにしてもらっている。

康敏のグラスからナンカとマルキサの芳しい香りが流れた。

〃一（ワン）・五（アイハラ）リンギだ。〃

途中で立寄った店で、ククルンには現在独自の通貨がなくマレーシアリンギが使えることは確かめていたが、財布を覗きこんでもハーフリンギが見つからなかった。

〃僕もハーフリンギを持ってない。〃

支払われた二リンギに今度は給仕が頭を抱えた。これだけ繁昌している店なのに、やはり通貨が不足しているのか…。康敏は常連客たちがセサルと呼んでいる給仕に、査証申請と外人登録をするために公爵邸を訪れる必要があること、そして市内に宿所を捜したい旨を伝えた。

外人旅行者の彼が単独で現れたことで凡その見当はつ

いていた。セサルは康敏に今日は公爵邸が閉館しており、事務手続は明日でも問題ないといった。今晩は茶房の離れの一室を用意しようとも。

やはり国境を超えて四十粁を歩いた脚は疲労の極みに達していた。そして辛そうにジュースを啜っている康敏にセサルは紙幣を一枚渡した。

〝釣銭の代りさ。〟

珍しい掘り出し物に気づいた客たちが康敏の卓上に集まってきた。サッカーゲームに熱中していた面々も寄ってきては歓声をあげはじめた。

〝十五キプ(リマプラス)！〟

店の隅で羽目板張替をしていた職人達もしきりに見入っては何やら康敏に説明しているようだったが、その言葉は全く理解できない現地語で、時どき「日本(ジーブン)」「ジュバン」という単語が含まれていた。

その大工に代ってセサルが、この紙幣は連邦併合直前の時期に独立王国時代最後の通貨として発行されたもので、図柄には前王の好んだ日本の古典芸能が描かれていると説明した。紺一色の地味な印刷だが、よくみると確かに能楽「箙(えびら)」の一場面だった。15KIPの表額の下にはEVIRAの文字、梶原景季らしき武士の霊が一ノ谷の岩山の上に現れ、旅の僧に回向を願い出ては消えてゆくという場面が描かれていた。霊は消えゆくが僧の手には梅が枝を挿した箙が渡るという梗概となるのだ。

康敏は高校の古典の授業で担当教師の「一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)」の熱弁を聞いたことがある。古典は決して得意ではなかったが、源平盛衰記の「宇治川合戦」や「鵯越」を通して梶原平三景時とその子源太景季の人となりを知っていた。何より教諭があまり集中していなかった康敏を名指し、彼は一句詠むこととなったのだ。

箙挿す単矢(ひと)綻ぶ梅が枝の

遠い旅先で旧紙幣を前に、康敏は今一度自らの句を思い起こした。

あとで冷菜(ゴールドミール)を届けると約束し、セサルに案内され当夜の寝室に通された。

不意に眠ってしまったのだろう。縁側から陽光が差しセサルの呼ぶ声を聞いた。宿賃四リンギには朝食が含まれていて、昨日長時間坐っていた席に大盛の炒飯(ナッゴレン)が置かれていた。賑やかだった店内も、客一人の静かな空間になっている。

〝片付が済んだら公爵邸(ブリ)へ送って行こう。〟

プリ(王宮)と呼ぶセサルの言葉は愛郷心を感じさせる。鬱蒼とサギンの繁茂する林を切開いた小径を通り、

沼地に面した石造りの館に突き当った。迷路のような館の廊下を進んでゆくと執務室はここだといわれた。

〝お早う（スラマパギ）、お待ちしていましたよ。〟

陽気な中年紳士が真紅の衣装で挨拶した。康敏は眼前に現れた要人に半ば畏怖し、査証申請と登録だけを済ませたいと思った。しかし彼の来訪は予め伝えられていたらしく、丁寧な接待が康敏を招くことになるのだ。

〝今は市長（ダトウ）のような仕事をしていますがね。〟

大公は、目立った産業のない人口四千人足らずのククルンでは外人観光客の訪問も滅多になく、領事部の業務も適宜、その都度行っていると話した。世話好きな人柄のようで康敏の帰国の途を心配しているのだ。例えばもし往路を戻るとなると途中リシンギ、アンブラン、ディタンサという三つの小公国の通貨査証が再度必要となるため瀾滄州から中国の雲南省へぬけるルートを考えていたのだが大公はそれを薦めなかった。インドシナ連邦崩壊後二十年近く中国民軍が瀾滄州を越境して侵攻し、ククルンにはマレーシア軍の駐留があってなんとか平和を守ってきたという歴史があった。

公爵の家族と同伴であれば途中ラオスの査証があればマレーシアまで行けるというが、康敏には雲の上の話と感じられた。しかし大公は、息子が数日中に在籍するマレーシアの学校に戻るというので同行すればいいと提案するのだった。

康敏はそれとなく話題を変え、十五キプ旧紙幣を出し昨日セサルから聞いた博物館のことを尋ねた。しかし実際の博物館は併合後の占領軍の掠奪や焼失のために機能を失い、古い教会の礼拝堂跡資料庫として大公の息子がいずれ再開させたがっているということだった。

〝そう、昨日は倅が大変お世話になりました。〟

戸惑ったが国境付近で単車を修理した相手、あのヨシプが大公の一人息子だったのだ。彼は自宅邸に着くと先ず父に報告したのは親切な日本の若者のことだった。部品のスペアも工具もない状況で、まるで魔術師のように修理してしまったと、さらに当のスズキ九〇ccを修理した人に名をきけば彼はミスター・スズキだったと。

〝こちらへどうぞ。〟

大公は中庭へ康敏を案内した。葦の生い茂る湿原が美しく、サギンの林はどこまでも丘陵を覆っている。そして中庭の一隅で彼を待ち構えていたのは要修理の中古電気製品の山だった。永いこと使われず錆だらけになった台湾製やタイ製の掃除機や扇風機の数々はここククルンでは販売網も確立していないから、ごく稀に市民の手に流れることがあっても、一旦故障してしまうと全く用をなさなくなるというのが常であった。

息子の話を大公はとても興味をもち、その魅力ある若

者にこの国の現状を理解して貰い、彼の腕前を活かして頂く一計に出たのである。

前日康敏が茶房の片隅で憩っていたころ、公爵邸の中庭へは市民を通じて修理を要する電気製品が次々と持ち込まれていた。そのさい彼の噂は一部市民の間では既に話題となっていた。

〝父さん、これ全部彼に?。〟

ヨシプは苦笑いをした。単車を修理したあと長距離を歩いて到着したばかりの康敏の体調を案じていたのだ。

〝大丈夫、繕せるよ、多分。〟

それらに目を通してみると康敏の思惑通り大半は接続部分からスイッチが原因で作動しないもので決して動力部位に支障はないのだ。軽い手つきで一つ又ひとつと繕してゆく。彼が作業を終えたのは正午少し前だった。錆の凄さに木唐辛子液で対抗したため手が赤く染まってしまっていた。

沼沢へと伸びている木道の傍らにテラスがあり、そこへヨシプが昼食をもって現れた。

〝君には本当にすまない。けれどこれがククルンの実情なんだ。許してくれないか。父は明日も君に依頼しようと農機やトラクターを集めさせている。君を国賓の扱いにしてククルン滞在期間中の費用をみるといっている。僕としては君に経済的余裕があると思えないし、かといって無理な注文はしたくないのだが。〟

ヨシプは馴れた手つきでサギンの葉から餅をとり出し頬張っている。餅の献立は初めて会ったとき康敏が美味しそうに食べていたのでそれを選んだというのである。

〝僕は父のやり方は強引だと思うが、確かにこの国に欠けているのは技術者なんだ。実は僕もマレーシアの工業大学に在籍している。けど日本の学生は魔法使いみたいなことをしてしまうんだな。〟

興奮がちに話すヨシプを横目に康敏は黙って餅を平らげてしまったが、遠くから歩いてくる人の姿が見えたので確認するとセサルだった。康敏の荷物を新しい宿所にと持ってきてくれたのだった。

〝君が繕した機械は皆持ち主が喜んで持ち帰ったよ。〟

セサルが言った。しかし康敏は忙しさにかまけて忘れていた旧紙幣のことを思い出した。

〝この札なんだけど、いつ頃発行されたんだろう。〟

ヨシプはその十五キプ紙幣を手渡されると暫く考えていた。独立王国最後の発行紙幣で、インドシナ連邦に併合までのごく短期間通用していた筈だと言った。図柄となった日本の能楽については彼も意外という顔をした。

〝王国最後の王となった祖父は日本にとても関心をもっていたと亜州諸国のなかで侵略を受けた歴史をもたない数少ない国のひとつだし、何か幻想的なものを感じてい

たのかもしれない。僕はそんな祖父の気持ちが判らないでもない。〃

ヨシプは康敏の手先を見ていた。

〃紙幣はすぐ見つかるだろう。コテージへはセサルに案内して貰って、寛げると思うよ。〃

一向に雨雲の現れない熱帯の風に負けたのか、即座睡魔に襲われた。午睡を貪り再び目醒めたのは大空が紅く夕映えしはじめた頃だった。

〃スズキ、いいかい。〃

ヨシプがやってきた。見てくれと言わんばかりに二枚の紙幣をとりだした。赤い印刷の六五キプ札は源氏物語起原の「葵上」、病床につく葵上を恋敵六条御息所の生霊が鬼の形相で苦しめる場面、悪霊に抗じて祈祷行者が争うが鬼の力は衰えないという凄まじい一幕が描かれていた。もう一枚は草色の三五キプ札、対称的に「杜若」の麗わしい舞台が映されている。水辺一面に咲く杜若と在原業平の初冠唐衣姿で踊る妖精が愛らしい。

康敏は興奮を押えきれぬ感動でひとり悦に入っていたが、ヨシプの云うにはもう一枚高額紙幣があった筈だが見つからなかったらしい。しかし、いずれも半端な額面でこれらが発行された当時のククルンの経済事情の苦しさが浮彫となって露呈されたことで、王族の末裔ヨシプは決して愉快ではなかったのである。

〃態態有難う。〃

三日目の朝、重々しい音が康敏の惰眠をさめさせた。窓の外をヨシプが向かってくる。見てほしい農機は三台で動かせそうな気配もあったという。彼のために洗い晒しのツナギが用意され、もう後には引けない雰囲気だ。

康敏は一台のトラクターのエンジン油を排出し、その色に惘れてしまった。こんな質の悪い油を交換せずに走らせていたのか、勿論他の二機も同様の状態だった。

心配したヨシプがやってきたので彼にエンジン油はあるか尋ねると、倉庫に全く使われていないドラム缶にあるからもって来させると言った。

〃機能は全くもって正常、使う人の判断で油の交換が必要だね。あんな色になるまで使っちゃ…〃

〃スズキ、あとは彼らがやる。行水をして汚れを落としたほうがいい。〃

苦難なく作業を終えたが、油まみれの姿にヨシプは同情した。少し早い昼食が用意できそうだからそれまでの間、本宅のラウンジで休んでいてと告げられた。空に積乱雲がたちこめ、今にも夕立のきそうな天気だ。

誰もいない広間でひとり遣り過ごしていると、康敏はすすけた布カバーに隠れたアプライトピアノを見つけた。蓋が開いたので鍵盤を叩いてみるが、なかなか良い音が

出ない。それもよりによって中央のC音から高二オクターブの重点範囲がいかれている。ハンマーのフェルトが弦を鈍く擦る音が出た。ポケットには返し忘れた小型のスパナがあった。何とかチューニングハンマーに使えないか…。しかし彼には中学生の頃の苦い思い出があった。演奏の上達をいいことに調律の真似事をして指導員に叱られてしまったのだ。ピアノを弾く資格なしと言われ、それ依頼素人考えの調律は自重した。

〝弾くの?〟

背後でヨシプが見ていた。

〝音が出せそうなんだけど、開けてもいいかな?。〟

〝いいけど。〟

案の定打弦部に十糎ほどの布切れが挟まっていただけだった。長いこと使われていないようだがこのピアノは弾ける。その気持ちが彼の指先に力を走らせた。

激しく演奏してみる。ヨシプは唖然とした。グリッグの協奏曲・第三楽章、難曲のひとつだが一本調子で弾くことができるので常に手馴らしで様子を見られる。そして何より最も好きな曲なのだ。

暫くヨシプはこの演奏を聞き入っていたが、

〝食事ができたんだけど外は大雨で食堂も水浸しになっている。ここへもって来ようか。〟

誰に頼る訳でもなく彼自身がワゴンを引いてきた。ピラフを果実に詰めた見た目にも派手なメニューだ。フルーツはよくみるとナンカとマルキサだった。

タヒチやバリの観光客目当ての品と違い、器にされた果実が破裂しそうな位の詰めこみようだ。マルキサ(パッション)とナンカ(ジャックフルーツ)はセサルからの差し入れらしい。

〝君には驚かされっぱなしだよ。けれどさっき不安とか不満とかどうのって何だい。君の腕前は世界中で無敵だと思うが。〟

〝実をいうと僕はここに来るまで全く惰性で生きていたといっていい。将来設計なんてもちあわせていないし、大学でも目的があって勉強しているんじゃない。そう、ピアノも上級生の女の子に見せつけるために弾いていたにすぎない。クワルンでの三日間、旅行中ということを抜いても忙しい日程のなかで生きている実感が涌いた。それにあのお札、普段から自分の国のことを真剣に考えたこともなかったのに、僕は素晴らしい土地に生まれたんかなあって…。〟

〝本当に君は不思議な国からの来訪者だ。この国がこれからどうなるって見通しはたたないけど、君がひとつ鍵を開けてくれた気がする。礼を言うよ。〟

〝そんな、嬉しかったんは歓迎された僕のほうこそ。〟

〝きつい歓迎になってしまったね。僕の提案だけど、

ククルンの北西の外れの原生林に計画中に頓挫した植物園があるんだ。明日君を連れてゆくと言ったら父も承諾してくれた。何しろ人が通わなくなって久しいからね。僕はこれから用がある。詳しいことは夕方セサルの店で話そう。他のフルーツも味比べするといい。〃

大雨で冠水した低地の方へヨシプが単車で下っていったというのでそのことをセサルに問うと灌漑設備の再点検と見まわりだという。数年前からクワルンも農業水利も小型の機械が導入され、各農家の負担を考慮し管理は彼がしているそうだ。康敏を残したのは公爵家の後継としての自尊心もあったろう。

水溜道となった街路を小走りに茶房へ向かうとヨシプはまだ来ていなかったが、到着した日の午後のような賑わいになっていた。円卓に陣どり地元の人たちとふざけあっている見知らぬ外人がいた。流暢な英語で冗句を飛ばしている。

〃急いで(ハリーアップ)！ ハリー。〃

親しくなった者たちが呼んでいる。セサルによるとこのハリーという名の豪州(オージー)人は今朝瀾滄州境のシテグリから歩いてきたという。ククルンに着いてバナナ酒をすっかり気に入ってしまい何杯も飲んでいるらしい。康敏が気になっていた雲南省方面のバスについてきいてみると毎晩深夜零時に大理ゆきが発車すると言った。バスは麗江への便もある。断定的な言い方で信じきれないところもあったが、確かに中国経由で来ていたのだ。

ヨシプが手土産をもって入ってきた。巡視路脇に咲いていた野生蘭を空缶の鉢植えにしてある。カウンターに置かれると、〃ギブミーアフラワー〃コールが始まった。

〃酒を飲んでいると外国語の習得が早いというのは本当らしいな。彼は大丈夫、きょうは泊まりだ。明朝寝呆けていたら「ウェイクアップハリー」と怒鳴ってやるよ。〃

ヨシプと康敏はマンギスジュースで乾杯した。

群青色の空のまだ暗い六時前、ヨシプが迎えに来た。植物園までは四十粁以上悪路が続くので早く行こうということだった。上の方には食堂も商店もないから弁当を用意してきたと、そして飲み物はフルーツを見つけて手製のジュースを作ろうということになった。

見覚えのある単車だ。プラグは交換していないという。ヨシプは自信ありげに、今度は修理してみせると言っている。

相乗りで早速出発、十分も走ると民家は見えなくなり、耕地の代りに椰子の目立つ原野となる。一時間もたつと荒れた細い道は密林の奥地へ入りこみ、勾配は険しく執拗な登降を繰りかえす。山地を深い谷が何本も横切って

いるため、そのつど一気に下りきり、再び急な登りにさしかかると単車は何度もエンストを起こしそうになった。ヨシプのライディングも馴れたもので、康敏は振り落とされそうになることもなく、不気味なジャングルを進み入り、熱帯の風が涼しく変わってくると小さな木造小屋に着いた。ここが管理棟となるべきところだったのだ。

少し休もう、ヨシプに促され痺れた腕を伸ばしながら中に入る。テーブルの上に古い印刷のパンフを見つけた。ここの植物園が開園される予定だった当時のもので、六八〇平方粁も熱帯原生林の手前、入口から五粁ほどまで道が設けられ世界庭園としてあらゆる植物を展示するとしるされていた。ヨシプの話では遊歩道だけなら単車で廻れるが、かつてマレーシアの園芸技士によって植栽された火炎木の並木や生産用ゴム園はその後何十年と放置され密林と変わらなくなってしまっているという。

単車を降り、二人は三角帽子の岩を目指す。二〇〇米の直登でその頂上から広い密林が見渡せるというのだ。朝の陽光に反射して小さく湖面が光った。

〝十粁位かな。附近はずっと沼地で今くだりで二日かかるらしい。そうだスズキ、君の住む町の湖のことだけど、大きな湖かい。〟

康敏は郷里の琵琶湖のことを喋っていたのだ。

〝トンレサップのような大きな湖で、雲がかかると向こう岸が見えなくなる。〟

今度の旅でヴァイヒリア、バトゥル、ソングラ、トンレサップ、インレーと五つの湖を訪れてきたが、それはいかなる土地でも自分が郷愁を求めているからではないのか、康敏は思い始めた。そしてヨシプは遥か日本の、康敏の故郷を想像していた。

人間二人がやっと坐れる鉢峰の頂上から、次第に薄雲が大地を覆ってゆくのが確認できた。管理棟に戻り弁当を開けた。

〝スシだよ。ジョージタウンで食べた日本食をアレンジしたつもりなんだけど。〟

それはすっかり近江の名物「熟鮨」の体を成していた。

〝僕は今日の夕方、出発しようと思う。シテグリで大理ゆきのバスに乗る。〟

〝ハリーの言うことを信じるの。だったらシテグリまでは無理だけど一粁手前位まで送ってゆこう。日本へは何日頃。〟

〝大理へ十五時間、そして昆明初の飛行機は予約がとりにくいというから僕は上海まで四日間、急行列車の軟臥で行くつもりだ。上海から大阪まで三日、日本へは八日目に着くことになる。〟

〝君には今後発展し続けるククルンを見てほしいけど、僕としてはビワコを見ておきたい。君のような適確な判

断と行動力を備えた人間として生きてゆくために。
雨が降りそうだから行こう。川の水量が増えてしまわないうちに。〃

Miras el lago tocas su superficie,
Como punteas al trazo guo unen a su rinas.
Se acarice a la honda,
se acontan dji,sam,sue al latido.
Por peregrina a mil lagos al dia.

その湖の臨み、水面に掌をあて
その指先に募る水紋を弛くように
波を撫で、鼓動を数えて御覧。
いつか千の湖を巡礼する時の為に。

フェデリコ・フイス・アグード
「千の湖の巡礼」より

了